日本人は、日本の文化を満洲という異国の地に適合させることができなかった。

本書は「日本人として海外で生きる」とはどういうことか、という難解なテーマを扱っている。このような視点から、資料を用いて何かを実証するには自ら限界を伴う。しかし、その分専門外の人でも読みやすく話が進んでいき、戦前満洲に渡っていた人はもちろん、戦後世代の人間にも興味深い内容となっている。本書が取り扱っている時代は七十年以上前だが、グローバル化が進み異国間のコミュニケーションが求められる二十一世紀に生きる私たちにとっても、有益なメッセージが込められている一冊である。

（吉川弘文館　二〇〇四年九月刊）

会員だより

瀋陽實勝寺の法会―その現在と過去―

広川　佐保

現在の瀋陽

瀋陽は中国東北地域の代表的な都市であるが、さまざまな顔を持っている都市である。現在、瀋陽市は遼寧省の省都であるとともに、かつ中国有数の工業都市でもある。近代以前の瀋陽について見てみると、六二五年、ヌルハチが同地に遷都したのち宮殿が築かれ、盛京（満洲語でムグデン・ホトン）、奉天とも呼ばれた。また、瀋陽近郊には永陵、福陵など歴代清朝皇帝の陵墓が設けられたが、瀋陽という都市自体が昭陵（ホンタイジの陵墓）余地の一部でもあった。満洲族や清朝にとって中国東北や瀋陽は、発祥地として非常に重要な都市であったが、内モンゴル東部の各旗との接点でもあった。内モンゴル東部のモンゴル人にとって瀋陽はもっとも近隣の大都市であり、二十世紀前半に、日本人の援助によりモンゴル語の新聞『盛京蒙文報』が発行

されたほか、張学良によって奉天東北蒙旗師範学校が設立されたこともあった。このほか瀋陽には回族やシボ族の人々も居住しており、それぞれの寺院も建立されている。また、二十世紀初頭より、朝鮮人移民が流入し、現在も朝鮮族の集住区や商店、韓国系デパートなどがある。辛亥革命以降は、奉天の実力者として張作霖が台頭し、中国東北のみならず北京政府の覇権をあらそった。一九三一年以降は日本の支配下に置かれ、満洲国の一部となった。このように瀋陽は清朝やその他の民族を結ぶ都市であるとともに、日露戦争や満洲事変などの舞台ともなった。現在、瀋陽市は人口約七百三十六万であり、人口のおよそ九割を漢人が占めるなど、かつての清の陪都としての面影は少ない。しかしながら、残された史跡をたどると瀋陽の多様な面を垣間見ることもできる。そのひとつとして、ここでは瀋陽に残るチベット仏教寺院、實勝寺の歴史と現在の姿について見てゆくことにしたい。

實勝寺の歴史

實勝寺は、別名、皇寺（黄寺：シャル・スム）とも呼ばれ、正式名称は蓮華浄土實勝寺である。一六三六年、ホンタイジはチャハルを制圧し、満洲、モンゴル、漢人から推戴されて皇帝の位につき、国号を大清と改めた。實勝寺は一六三八年、ホンタイジのチャハル征服を記念して建立されたチベット仏教寺院である。当時、モンゴルの僧侶が白駱駝にマカハーラ仏を載せて献上したという言い伝えも残されている。その後、ホンタイジは毎年正月、親王や大臣、モンゴル王公とともに實勝寺に参拝したという。實勝寺は牌楼や石碑、山門、鼓楼、天王殿、大殿、東西の配殿、経堂、僧房などをかまえる中国東北随一のチベット仏教寺院であった。清朝時代、政府は北京に雍和宮を設立するなどチベット仏教を保護したため、モンゴルやチベットにおいてチベット仏教は興隆をきわめた。清代、モンゴルやチベット各地に多くの寺院が建設され、多くの人々が出家し僧侶となった。

かつて實勝寺では毎年十回前後の法会が開催されていたが、なかでも年二回開催されるツァムは非常に著名であった。ツァム、あるいはチャムは、打鬼、跳鬼とも記され、チベット・モンゴルの仏教寺院の法会で行われる密教儀礼である。各寺院ではそれぞれ異なるツァムが演じられ、僧侶が獨髏や鹿、神仏の面を被って舞を繰り広げ、悪魔祓いをおこなう。かつて實勝寺の法会には百二十名以上の僧侶が参加し、牛、鬼、蛇神に扮して舞踏を繰り広げたという。

しかしながら實勝寺のツァムは民国時代より廃れはじめ、戦争や文化大革命の影響を受け、一九三〇年初期より行われることもなくなってしまった。

辛亥革命以降は、日本の軍人が實勝寺に出入りし、情報収集を行うかたわらモンゴルの王公と接触を持とうとしたこともあった。また、このころ實勝寺からは内藤湖南により大蔵経が日本へもたらされたこともよく知られている。一九二〇年代末から一九三〇年代にかけて九世パンチェン・エルデニは中国東北地域にて活動を行っていたが、實勝寺にも滞在していた。中国東北が「解放」された後、一九四六年の火事により、實勝寺の山門や牌楼などの建物が消失してしまう。また、おなじころ境内に安置されていた黄金のマハカーラ仏も行方不明となってしまったという。實勝寺は一九六一年省の重点文物保護単位として認定されるものの、文化大革命の被害を受け、ようやく一九八〇年代になって宗教活動を再開した。

實勝寺の法会

筆者は二〇〇〇年八月に瀋陽を訪ね、その際、当時遼寧大学に留学していた上田貴子さん（現在、近畿大学）とともに、瀋陽實勝寺へ出かけた。われわれが實勝寺を訪ねた日、うだるような暑さのためか境内は人もまばらで、モンゴル人の初老の僧侶と小坊主たち数人がいるだけであった。僧侶たちは、われわれが日本人であるとわかるといろいろ話しかけてきた。小坊主たちは内モンゴル東部出身のものが多いという。境内のなかには仏具店、位牌置き場などもあった。位牌は花に飾られて安置されていたが、そこにしるされた故人の出身地（？）には内モンゴル東部の地名もあった。われわれはいくつかの建造物を見学したあと、實勝寺を後にしたが、その際上田さんが門前にある看板に目をとめた。これによれば農暦にあわせて幾度か法会が開催されるという。くしくも夏の法会は私の滞在期間中である。せっかくの機会であるので、法会を見に来ることとした。

当日、われわれは朝九時前に門前に到着したが、すでに境内は大変な混みようで、熱気にあふれていた。また、先日訪問したときにはまったくいなかった物乞たちが五人ほど、門前につっぷして、哀れみを競っている（帰りにはいなかったので、別の場所に移動したものと思われる）。さて、境内にはたくさんの人々があふれかえっていたが、観光客など無論一人もみられない。また、参拝者は漢語を話す人々ばかりであり、おそらく近隣からあつまってきたものと考えられる。しばらくして外部より高僧が到着し、黄色

の傘を掲げてもらいながら院内に入ってきた。先日の小坊主たちも今日は真剣な面持ちで準備にいそしんでいる。大変な人だかりで儀式の様子はよくわからなかったが、人々は紙で作った三〇センチばかりの灯篭のようなものを手にしている。読経のあと、高僧は院内を練り歩き始め、参拝者もこれにつきしたがって、院内の建物を右回りに回り始めた。私たちは建物の隅のほうで目立たないようにしていたが、参拝者は院内をかなりの速さで進み、その数が多いため最後尾がどこであるかわからないくらいであった。とにかくものすごい熱気であった。高僧と参拝者ともに何度か境内を回った後、最後に参拝者たちは紙の灯篭を院内の火にくべて散会となった。このように法会の儀式は進行したが、チベット仏教寺院の儀式にしては、一風かわったもののように感じられた。

實勝寺の現在

さて、この日われわれが目にした實勝寺の法会とはいったいどういう意味があったのであろうか。のちに實勝寺が発行しているパンフレットを確認すれば、旧暦七月十五日（新暦では二〇〇〇年八月十四日にあたる）は「金剛仏廟会」にあたり、ここで僧侶たちは金剛経を念じることが記されている。

チベット仏教の寺院ではそれぞれの宗派や寺院によって儀式も異なるが、夏の法会として祈願会、善縁会などが開催されることがある。また、法会のなかには僧侶と参拝者がともに寺院を遶行（本堂をまわりながら読経すること）する儀式もあるようである。一九五〇年代の記録によれば、實勝寺では、チベット仏教のさまざまな行事とならんで、七月十四日から十六日にかけて「盂蘭盆会」（うらぼんえ）が開催され、そこでは僧侶たちが経典をそらんじることが記されている（中共中央内蒙古分局宗教問題委員会編『内蒙古喇嘛教史』、一九五一年）。

この「盂蘭盆会」には、さまざまな起源があるが、死者の苦しみを救うために、仏や僧に食物をささげて供養する行事であり、祖霊を供養する法会のことを指す。つまり日本の盆である。中国でも道教や仏教のなかに同様の儀礼が見られ、これを民間人は祖先を供養する日、すなわち中元節として理解している。實勝寺でも、この法会を実際は盂蘭盆会と呼んでおり、儀式の担い手はラマ（僧侶）であるが、参観者にとっては一般的な盂蘭盆会として理解されているのではないかと感じられた。チベット仏教寺院である實勝寺において、どのような経緯で盂蘭盆会が開催される

ようになったのか、実はよくわからない。おそらく實勝寺における盂蘭盆会は、瀋陽の変貌にしたがって、チベット仏教の儀式と現地の人々の信仰心が融合したものではないかと考えられる。これらは瀋陽という都市の多様性を象徴しているともいえるだろう。

以上、筆者のわずかな見聞をもとに實勝寺の法会について記してきたが、驚いたことに實勝寺みずからホーム・ページ（http://www.syhuangsi.com/syjj.htm）を運営していることを知った。HPには寺院の概略が記されるとともに、経典や仏教音楽などがダウンロードできる仕組みとなっている（ちなみに仏教音楽は漢語の仏教音楽であった。お寺でもCDやVCDを販売しているそうである）。また、法会の様子を写した写真なども多く掲載され、盂蘭盆会の様子や二〇〇六年度の旧正月の様子なども見ることができる。HPによれば、二〇〇二年九月、瀋陽市人民政府は、まわりの建物を一掃し、牌楼を建設するなど實勝寺を大々的に修繕し、大掛かりな記念式典を開催した。その際、政府は寺院に白駱駝に乗せられた巨大な金のマハカーラ像を奉納したほか、寺院ではツァムも復活することとなった。写真を見た限りでは、かつてのうらびれた實勝寺の様子は微塵もなかった。

現在、中国では大掛かりな文化事業として「清代纂修工程」が行われているほか（『満族史研究』第四号、二〇〇五年）、内モンゴル・フフホトでも清代の綏遠副都統衙門や公主府の修復・公開が進みつつある。實勝寺の修復や観光地化がこのような流れにあるのかはわからない。いずれにせよ實勝寺では、新たな時代の幕開けとともに、失われかけた「伝統」を修復し、またあらたな「文化」が生み出されようとしているのかもしれない。

（二〇〇五年一〇月に新潟大学人文学部赴任、中国近現代史担当）